

B O O K



『日本近代医学史』

小高 健 著

2011年7月1日 初版第1刷発行

元東京大学医科学研究所所長の小高 健先生が、明治初年から第2次世界大戦後までの我が国の医学の研究と教育に重点を置いた「日本近代医学史」を出版された。

本書の「前書き」で著者は「日本人は学問であれ宗教であれ、外国で生まれたものを我が国に移植して自分のものとし、文化を作り上げてきた。必然的に外国産を尊重し、それを持ち込んだ個人をも尊敬した。このような傾向は日本民族に深くしみついた歴史的な体質となっているのではなかろうか。」と述べられている。

「執筆に当たっては推論に走ることは避け、できるだけ文献に従うように心がけた。適切なものがあるときは複数の文献を採用し、情報の内容を確認した。」という基本姿勢が本書には貫かれている。歴史書はしばしば時の支配者により改竄され、あるいは判官びいきの読者に迎合する著者により歪曲される。それらが無批判に信じることから何が事実か見えなくなる。本書を通読し、私自身、この分野での歴史的認識が甘かったことを痛感させられた名著、一級の資料集である。

ことに(1)ドイツおよび米国の医学の状況、(2)北里柴三郎関連事項、(3)占領軍による医学教育の改革に多くのページが割かれており、いずれの部分も読み応えがある。中でも北里柴三郎は我が国屈指の医学者であり、著者は北里の開祖した研究所の元所長である。普通の方なら、北里を追頌し、当たり障りのない記述をするのであろうが、著者は信念をもって多数の文献を精読し北里の実像を紹介している。この部分は圧巻であり、私は、故 秋元寿恵夫先生が翻訳された「微生物の狩人」(岩波文庫)に対し、出版当初、我が国の高名な科学者達から受けた「科学者は通常の間人とは異なり、崇高な精神を持っていることを客観的に、かつ美しく描かなければならない。」という不当な酷評を思い出した。

さらに「膨大な文献資料の中から、割愛することができないものを拾い上げる作業には、広い知識と批判力が要求される。著者は、この選択が適当であったか、正確な記述になっているか、不安が残るところである」と述べられており、この謙虚な態度が、高度に推敲され読みやすい文章になっているのだと思う。ただ一点、気になったことは森林太郎(鷗外)が、「伝染病研究所の移管」の章を中心に紹介されている一方、「脚気の研究」では言及されていないことである。旧帝国陸軍の脚気惨害をめぐって、鷗外の責任に関しての議論は絶えない。鷗外が脚気問題で批判される多くは筋違いと最近の見解に従い、省略されたのであろう。しかし鷗外への批判が起こった理由について多少の解説があっても良かったのではないかと思うが、本書全体から見ると瑣末なことである。

最後に、私に本書を一読することをお勧めいただいた岩本愛吉先生(東京大学医科学研究所教授)に深謝したい。

医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院 臨床検査科科长・感染制御室室長 熊坂 一成

発行所：株式会社 考古堂書店

電話 025-229-4058 FAX 025-224-8654 定価：本体 8,000 円＋税